



[図書館談話室] 自己啓発共同研修：大学図書館における「学術情報リテラシー教育支援」を考えるに参加して

著者	井上 雪子
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	11
ページ	75-76
発行年	2006-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022018

自己啓発共同研修

～大学図書館における 「学術情報リテラシー教育支援」を考える～に参加して

井上雪子

はじめに

今回の研修は関西学院大学図書館員の自己研修のため用意されたプログラムであったが、他大学にも参加を呼びかけていただいたことと、自己研修ということであったため、今後のガイダンスの参考になるのではと考え参加させていただいた。

学外の研修に参加するのは初めてであったので、どのくらいの参加者があるのか見当がつかず、関関同立4校の図書館員が集まるのではぐらいに考えていたが、13大学25名の参加者があった。

用意されたプログラムはつぎのとおりで、和やかな研修会となった。

研修テーマ：大学図書館における「学術情報リテラシー教育支援」を考える

日 程：2005年11月19日(土)

13：30～17：00

場 所：関西学院大学 2階会議室

プログラム：

報 告：イリノイ大学等の取り組み事例報告
研究発表：「人文・社会科学分野の利用教育と
主題—利用者研究と主題別情報探
索法指導—」

報 告：各大学の取り組み事例、現状報告
討 議：①「学術情報リテラシー教育」を支
援するためには「何が」必要か、
また「何を」提供していくのか。
②支援サービスを行う担当者に求め
られる要件は何か。
③担当者育成プログラムについて
④その他

研修の概要、そのなかで感じたこと

参加校の中には、総合大学、単科大学、短期大学

があり、学生数や図書館の規模が違いそれぞれ学生のニーズも違っている。そのため学生に対する図書館利用案内の方法は各大学さまざまであったが、他大学の状況を聞くことは新鮮であったし、その中から真似たいと思う方法や反省すべき点も気付かされ、収穫のある研修会だったと思っている。このような機会をご準備くださった関西学院大学の図書館の皆様へ感謝いたします。

プログラムは、まず参加者の自己紹介があった後に、パソコン室に場所をかえてイリノイ大学での取り組みについてパワーポイントを使っての報告があった。

日本とは図書館の事情が違い、構成員も大学院をでて専門知識を持っているなどかなり様子が違っているとの報告であった。イリノイ大学では研修担当者が多くの労力を費やして数多くのプログラムを用意し、場所や日程のやりくりをされているとのことである。研修プログラムはすべてインターネット上で公開されていて、利用者もリアルタイムで申し込みができ参加することができること、講師は外部から招くことが多いことなどの話を聞くことができた。

図書館員にとっては職務上必要とされる知識を習得する機会が多く用意されていて羨ましいと感じた。しかしながら、ただちに同じ方法が本学図書館で実行できるものではないことも、同時に感じた。

つぎに、関西学院大学の学生に対する図書館利用指導の実際をご報告いただいた。

上位年次生対象のガイダンスでは、実施方法や内容も本学とほぼ同じであったのでうなずきながら聞いた。下位年次生のガイダンスでは参加者が少ないとのことであり、いかに利用者に知ってもらうか周知方法についての工夫が課題であるとの報告であった。いずれも同じ問題を抱えていると思った。

本学ではホームページ、ポスター掲示、当日の館内放送などでガイダンスの開催をお知らせしている

が、参加者は少ないように思う。各学部の掲示板にポスターを貼らせていただくなど周知方法については、検討の余地があると考えている。

なお、本学のガイダンス実施状況はつぎのとおりである。

上位年次生のガイダンスは演習の講義時間の1コマを使って実施しているが、担当者は指導教授の要望をお聞きして説明するデータベースを選び利用指導を行っている。また、参考図書などの書誌についても書架を案内し、専門分野の図書が所蔵されているのを見せている。図書館員では説明しきれない具体的な資料の解説などは指導教授にさせていただくこともあり、出席した学生は真剣に聞いてくれていると感じている。キーワードの選び方のコツを話したり、入力の方法によって検索結果が違ってきたりすることや、レファレンスカウンターでは利用者のお手伝いができることなど説明して図書館を気軽に利用してもらうようPRも併せてしている。

データベースの使い方を含む文献の探し方・入手方法の説明の前に、書庫の案内と入庫手続きのしかたなどの利用指導は業務委託のスタッフにお願いし、連携プレイで協力して進めている。

平成17年度は上位年次生対象のクラス別ガイダンス130回、下位年次生対象のガイダンスを98回、その他に学部へ出向いて行う実習型ガイダンスを20回実施した。専任職員のみでこれら全てを担当するのは、無理があり下位年次のガイダンスに関しては、OPAC (KOALA) の検索方法が中心の内容であるため業務委託スタッフに担当してもらっている。

他大学での取り組み事例や現状報告を聞くことができたが、OPACの利用指導ガイダンスにおいてはどこも同じ状況のようであり、誰が担当しても同じ内容になるようにマニュアルを作るなど工夫をしている。マニュアルについてもスタッフが作成したものを専任職員が目を通してだけの大学もあり、かなりの部分を業務委託スタッフに頼らざるを得ない現状になっていると思われる。今後人員削減がすすめば、専任職員がどこまで業務を分担できるのか難しい課題でもある。

レファレンス業務までも委託している大学があり驚きであった。隣席の参加者は、ご自分の大学も同じ派遣会社に業務委託しているので、いずれ同じ状況になるのではないかと不安を抱えておられるよう

であった。

レファレンス業務を委託している大学図書館では、専任職員は業務管理だけをやっているとのことであったが、図書館業務の経験が少ない職員にとっては実際に経験したことがない業務を管理しなければならない難しさが、知識および技術の継承がこれからの課題であるとの事であった。こういった傾向は本学でも同様に今後の課題となるであろうと思われる。研修によって知識を習得し継承していかなくてはならないが、日常携わっていない業務を修得するのは易しいことではない。図書館員各自が努力し、研鑽を重ねても限りがあると思われる。組織として人材を育成し、知識の継承を図っていかねばならないのでは、と思う。

配布用のパンフレット類についても、最近の学生は分厚く大きいものは敬遠し、そのようなものには手を伸ばさないようで、できるだけコンパクトなもの、薄いものを持っていくとのことであった。実際サイズを小さくした利用案内はけっこう持っていてくれているとの報告もあった。

今後パンフレット類を作成する時の参考にしたいと思った。

本学で上位年次用に作成している『文献のさがし方』は、盛りだくさんの内容を1冊にまとめているが、文科系学部用、工学部用に分けるとか、データベースについては検索方法を含めたりリストを別の冊子にするとか、検討しなければならない時機にきているのではないかと思っている。

おわりに

学外での研修会に初めて参加させていただいたが、各大学の取り組みや現状報告を聞くことができ、気付かされた点や今後の課題等少し見えてきたように感じた研修会であった。土曜日の午後という時間に制約があり、本題の「学術情報リテラシー教育支援を考える」を話し合う時間が少なくなってしまったことは非常に残念であったが、これからの自己啓発共同研修に期待したいと思う。

(いのうえ ゆきこ 閲覧参考課)